ほんとうにつけかえ運動が
幕府を動かしたのか?

なぜつけかえられたのだろう

―ほんとうの大和川つけかえ運動―

史跡 高井田横穴特別公開
二〇一四年十月十八日(土) 一〇時~十五時

二〇一四年九月十三日(土)~十二月七日(日)
柏原市立歴史資料館

月曜休館(祝日は開館)九時三〇分~一六時三〇分
入館無料
大阪府柏原市高井田一五九八―一
電話〇七二―九七六―三四三〇

【つけかえまでの大和川】

今の大和川は柏原から西へと流れていますが、これは宝永元年（1704）につけかえられたものです。それまでの大和川は、久宝寺川（今の長瀬川）、玉櫛川（今の玉串川）、平野川などの川に分かれて、北または北西に流れていました。これらの川は、大阪城の北でもとの淀川（今の大川）に流れこんでいましたが、大雨が降るたびに洪水をおこす川でした。

洪水にこまる人たちは、大和川をつけかえてほしいとお願いするようになりました。しかし、新しい川ができることに反対する人も多く、なかなかつけかえ工事は行われませんでした。このあいだに、つけかえを求める運動は、どんどん変化していきました。

【つけかえ運動の変化】

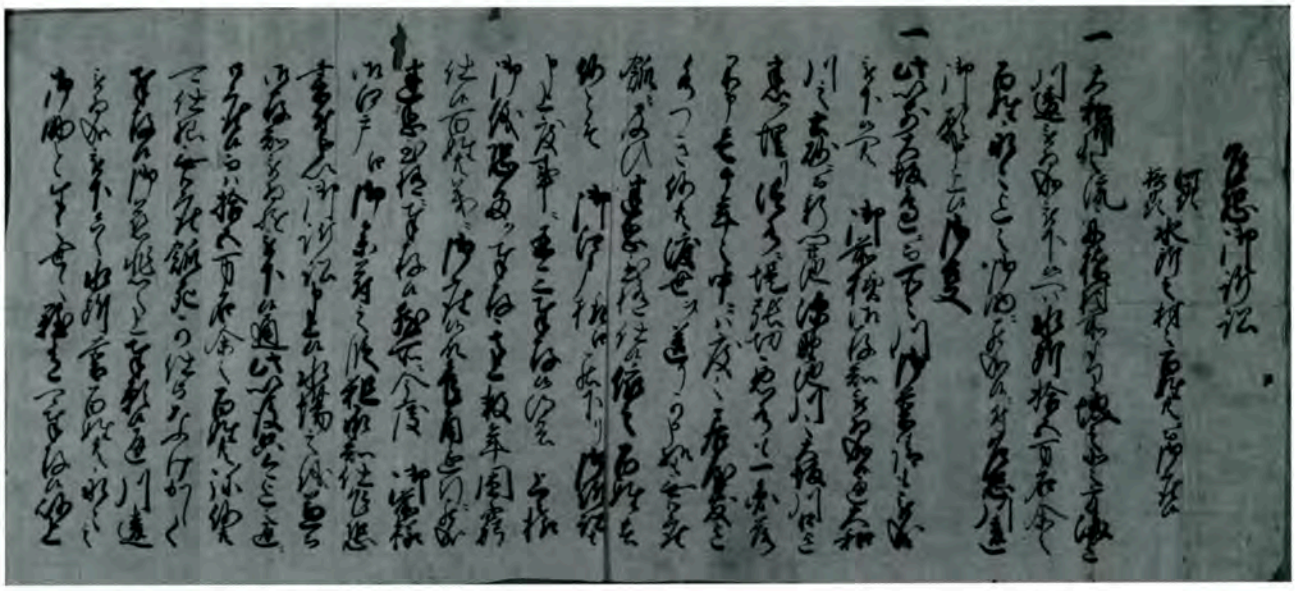
大和川のつけかえ運動がはじまったのは、つけかえから 50 年ほど前のことのようですが、くわしいことはわかりません。つけかえをお願いした文章で残っているのは、貞享４年（1687）の１月か２月に出されたものだけです。これをみると、15 万石あまりの百姓がつけかえを求めていると書かれています。「石」とは米の量を示す単位で、１石が 10 斗、１斗が 10 升、１升は今の 1.8 リットルになります。つまり、お米がどれだけとれるかを示したもので、15 万石ならば、今の北・中河内と大阪市の一部をふくんだ広い地域となります。

ところが、このお願いをしたあと、大和川のつけかえはしない、もうこのようなお願いをするなと、強くことわられたようです。同じ年の３月に出した文章では、つけかえをあきらめて、洪水が少なくなるように堤防や川の工事をしてほしいと変わり、７万石あまりの百姓からのお願いとなっています。このあと、大和川がつけかえられるまで、つけかえを求めるお願いはまったく出されていません。その２年後の元禄２年（1689）の文章では、３万石あまりの百姓からのお願いとなっています。運動に参加する人たちは、わずか２年のあいだに５分の１に減ってしまったのです。そのようななか、急につけかえが決まったのです。

【なぜつけかえられることになったのか】

洪水で苦しむ人たちを助けるためというのもつけかえ工事が行われた理由のひとつでしょう。しかし、それだけではなかったようです。つけかえ工事をすることが幕府（国）にとっても得になると考えたようです。工事の半分は大名に命令して行わせることにし、残りの半分は幕府が工事を行うことにしました。そのために幕府は 37,500 両ほどのお金をつかいました。

つけかえ工事が行われたあと、もとの大和川は田や畑に開発されました。これを新田といい、開発する人を入札で決めました。入札とは、もっとも高いお金をはらった人に開発することを認めるというものです。この入札で、幕府に 37,000 両ほどのお金がはいりました。つまり、工事でかかったお金がほとんどもどってきたのです。新田では、４年後から年貢（税金）がはいってきます。そうです。幕府はつけかえ工事で得をしたのです。これが、つけかえ工事を行うことに決めた、もっとも大きな理由だったのでしょう。



「乍恐御訴訟」貞享４年（1687）の大和川のつけかえをもとめたもの

【内容】

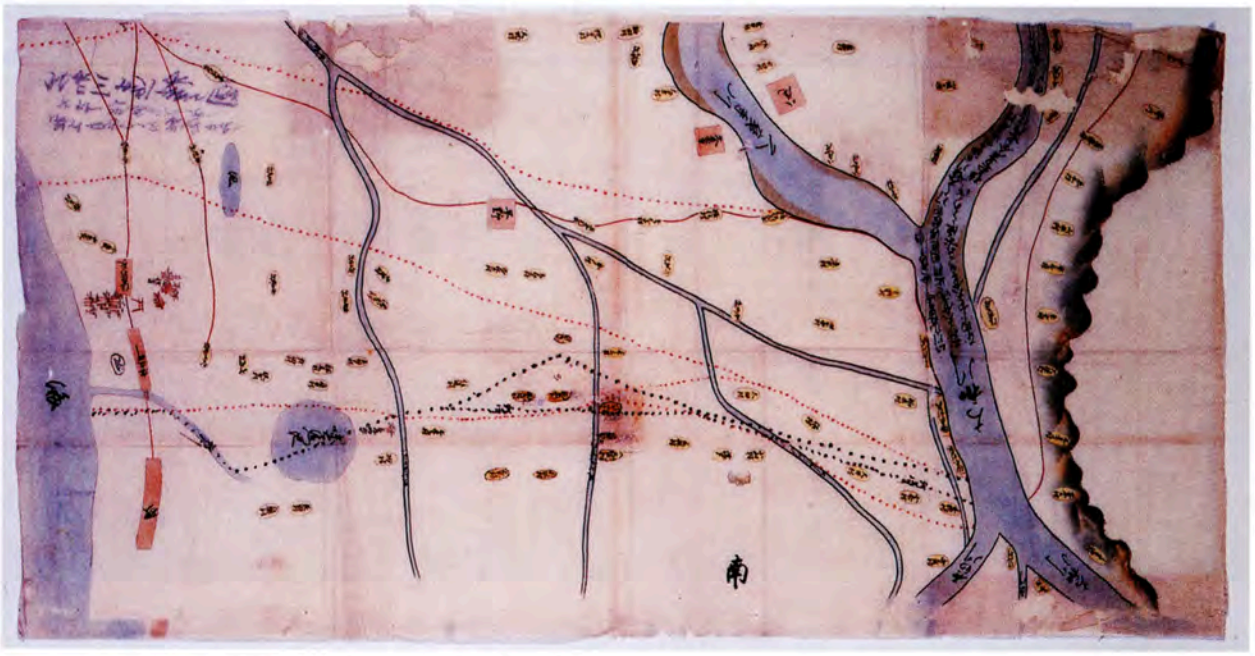
恐れながら訴えます

河内・摂津の水害に困っている村々の百姓たちでございます。

一、何年も前からお願いしておりますように、大和川の流れを船橋村の前から堺の北の方の海へ流れるように付け替えていただければ、水害に苦しむ十五万石余りの百姓たちが永遠に助かることになりますので、失礼なことですが付け替えをお願いいたします。

一、これまで大坂の周辺では、ところどころで川の工事もしていただきましたが、大和川を流れる土砂によって、新開池・深野池のほかいくつもの川が、大坂の河口までみんな埋まってしまい、洪水で堤防が切れると、あふれた水がまったく流れていきません。一年のあいだに、何度も家まで水がつき、生活を送ることもできず、食べるものにも困るようになり、とても迷惑しております。それで、百姓たちは江戸へ行って直接訴えようと何度も考えましたが、失礼なことでもあり、そのうえここ数年は生活にも困るようになったためにそれもできません。いつまでも付け替えが引きのばされることに、たいへん迷惑しております。これからも今までのような状態が続けば、十五万石余りの百姓たちは、どうすることもできず、餓死することになり、悲しいことでございます。このたび江戸よりお越しになったお殿様方も水害の状況をよく調査していただきたいと思います。失礼なことですが、やさしさをお見せいただき、お願いしているように付け替えをしていただければ、水害に苦しむ百姓たちみんなが、永遠に助けていただいたとありがたく思うことでしょう。以上。

（これは、ただ一つ残っている大和川のつけかえを求めた文章である。貞享四年（一六八七）に幕府に出されたものを中甚兵衛が書き写したものである。）



新川計画川筋比較図（大和川違積り図） 新大和川の計画ルートをかいている

【中甚兵衛】

つけかえ運動の中心となったのは中甚兵衛でした。甚兵衛は今米村（今の東大阪市）の人で、熱心につけかえ運動を進めました。展示している史料の多くも中甚兵衛の子孫の方が残されてきたものです。洪水からみんなを守りたいという甚兵衛の願いとは反対に、運動はどんどん小さくなり、つけかえはなかなか実現しませんでした。甚兵衛にとってつらい毎日だったことでしょう。幕府が、つけかえ工事は得になると考えたのはまちがいないと思いますが、甚兵衛たちの運動や思いがなければ、つけかえは行われなかったでしょう。甚兵衛たちの運動は、決してむだではなかったのです。甚兵衛は、その知識や努力を認められて、つけかえ工事のおてつだいもしています。

【つけかえ後の大和川】

もとの大和川は新田として開発されました。お金持ちの町人やお寺、地元の人たちも開発に参加しました。新田の多くでは、綿がつくられました。この綿からつくられたじょうぶな河内木綿は、高級品として高く売れたようです。

ところが、新しい大和川の近くに住む人たちには、いろいろとこまることがおこりました。新しい大和川のために自分の田畑を失った人もたくさんいました。それまでなかった洪水で苦しむ人、村が川の北と南に分かれてしまったところ、堺のように港が砂で埋まってしまうようになったところもありました。

大和川のつけかえは、いろいろな人たちの思い、努力、苦労などのうえに実現したものだったのです。しかし、つけかえ工事については、まだまだわからないことも多く、これからもっと研究をすすめていかなければなりません。